

須磨(上) (今様須磨の寫繪)

へ聚樂の御所の御遊とて 歌舞伎召されて浄瑠璃も 小野のお通が
松風に さて村雨は佐渡島の お国ときめて行平は 伏見山三が役
廻り へ面白や 馴れても須磨の夕まぐれ よそ目にそれと白浪の
寄する渚に恋ひ渡る 蜚には惜しき姉妹が 互ひに思ひ在原の
君に手枕川島の いつしか深う鳴海潟 へここは鳴尾の松影に う
らやましくもすむ月の 出汐をいざや汲もうよ へ女業にはお恥か
しや 裾をからげてかいたり捨てて 脛もあらはにぞんぶりこく
浦のみるめやわかめもままよ千鳥鷗がアレささやいて へ昼はエー
浜辺にナアエー汐なれ衣 夜は殿御と濡衣こちやくく 知つてい
る へ暮をエー松風ナアアエ 別れの鐘には涙村雨袖しぼる こちや
くく 知つている へアア辛氣 へ辛氣辛氣を汲みわけて見れば
月こそ桶にあり これにも月の入りたるや 月は一つ影は二つ満汐も
恋の重荷と思へばほんに憂しと思はぬ汐路かな

へわくらはに問ふ人あらば須磨の浦に 三歳此方住みなれて

へ潮汲む業のいとまなみ お宮仕への嬉しさも

へ言うに言はれぬ私等が 賤しい身にて幾夜半か

へ結ぶ縁の行平も

へあはれ古へを へ思ひ出づれば懐しや 雲井の上にありし時 月の
御会や花の宴 冠装束厳めしう 座に連なれど上の空 宵間にそつ
と局まち 彼も我等を待ち侘びて へなぞとかこちし爪音に ツン
テンころりんとさせもが露の 命かけたる中々も 今日ばかりとぞ田
鶴もなく 疑ひ故に勅勘受け 今さすらへの憂き住居 へそのさすら
へとやらなればこそ こんな浦曲へお出でもありて 夢にも知らぬ御
姿を 見上げ申して女氣に 身にも及ばぬ恋をさへ へ須磨のあま
りにやる方も 渚の小舟漕ぎ寄せて へ心のたけをつげの櫛 さしも
よしある御方と へ逢瀬嬉しき明暮に へ思ひは同じ恋草を結び合
せて芦の屋の へ仮そめ枕冥加ない 御睦言に引きかへて 今の仰せ
は憎らしい 私ばかりは変らじと 寄りそふ村雨 へ松風が 中をへ
だててコレ妹 へ姉を差置きまんがちな 行平様はこのわしが へイ
エなんぼ姉さんでも こればつかりは面面相がち へイヤそりやなら
ぬ へイエ私と へ常むつまじき姉妹も 色に沢立つ浜千鳥
へ風もあらぬにむれ立つ千鳥 さしくる潮の時なるや

へ珍らしさうにそれをまア

へなぜその様に

へおつしやるのぢやエ

へそれ 二人が角めだちやるを見て 千鳥が笑ふ恋争い
仲睦まじう わつさりと

へ浮いて踊の
へ手を揃へ

へ一と夜 寝る身を比翼とおもや へ立つ名もままの川千鳥 縁も
深き友千鳥 夕浪千鳥約束の 月にも雲の村千鳥 一人うき寝を
島千鳥 とは知らぬ男のにく小夜千鳥 焦れくへて 磯千鳥 通
ふ千鳥の浦づたい

へサアくこれで仲直り 右と左に松風村雨 先へ庵りで待つ
ていや

へそんなら必ず

へサア行きやく

へ君が仰せに否ものう 打つれ庵へ急ぎ行く

へ勅免によつて帰路の行平 それと二人に打明けて 言はゞ名
残も尽きまじと 包むがうちにさし来る汐 沖の千鳥のたち
騒ぐは はや出船の時来りしか せめて二人へこの一筆 か
たみにそへる烏帽子かりぎぬ この松ヶ枝に残し置けば あと
にて心なぐさめくれよ この上は猶予は恐れ いずれ伝てにて
呼迎へん 兩人さらば

へさらばの声も汐ぐもりしめる心を取直し 御船を指してぞ出で給
う